

# 松浦武四郎が残した記録(2)



美幌町豊幌地区（豊幌川河口付近）は、ワワウシ（川の徒渉場所）だったと考えられます。現在も、水深は大人の股下くらいと浅いのですが、水底は岩盤となっており、すべりやすくなっています。わずかに護岸されていない部分が残されており、網走川のかつての雰囲気を感じることができます。

## ■ワワウシ

### （原文）

此処本川の越場浅瀬にて急流。一同に裸に成て川に入。川中凡二十間。東岸崖には雑樹陰森として笹原なり。上（り）て山の平を通る。此処より川下はアバシリ湖日誌に志るせば爰に志るしぬ。凡櫛柏原小笹の中に、先公料の古道有るをたどり行こと五六丁・・・

（松浦武四郎著 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 上「北海道出版企画センター刊より）

### （現代語訳）

ここは、本川（網走川）の渡場になっていて、浅瀬で急流。一行は裸になって川に入る。川幅は、約36m。東岸は崖になっていて、雑木林でササ原がある。この崖を上がって、平らな所を進む。ここから下流は、アバシリ湖日誌に記すので、ここでは省略する。この辺りは、かしの木が多い林で、小笹の中に、先公料の古い道があり、これをたどって約500～600m・・・

（美幌町郷土史研究会 土谷勇次郎氏訳）

## ■ヘテウコビ

(原文)

此処川二すじに成り右の方は本川、左りの方はビホロ川すじのよし。爰<sup>こゝ</sup>にて金鳥西に落かかりけるまま上陸して一宿するに、夜に入て鹿多く来る。また其<sup>こゝ</sup>辺り細道多き故に是を聞に皆カツクミ、ビホロ土人の獵路なりと。夕方<sup>ます</sup>鱒七八頭にチライ二頭を取り喰<sup>しよく</sup>す。またコタンチシは狐<sup>びき</sup>一<sup>い</sup>疋を射取帰り、樹下月陰<sup>ほうむり</sup>にて屠<sup>ころ</sup>て、半樽<sup>きよう</sup>の酒に興を催し、夜五ツ前<sup>ようやくふす</sup>に漸々臥。

十一日出立 是より流れ下りに下りける処、五ツ半過にレフンシリえ着<sup>りよう</sup>し聊休るひ出るに、今日は西風有て湖中<sup>はなはだ</sup>甚<sup>はなはだ</sup>荒くして水夫も甚<sup>はなはだ</sup>困りたりけるが、押上るや…

(松浦武四郎著 戊午東西蝦夷山川地理取調日誌 中「北海道出版企画センター刊」)より

(現代語訳)

ここで、川は2つに分れ、(本流から見て)右の方は本川(網走川)、左の方はビホロ川筋(美幌川)である。ここで、太陽が西に沈<sup>しず</sup>む頃に上陸して、一泊<sup>やえい</sup>野営する。夜になって、鹿<sup>しか</sup>が多く現れる。また、この辺りには、細い道が多くあるので、このことを聞くと、これらの道は、カツクミ(活波)、ビホロ(美幌)のアイヌの狩<sup>しかりよう</sup>猟のための道だという。夕方<sup>ます</sup>、鱒7~8匹に、チライ(イトウ)2匹<sup>ひき</sup>を捕って食べる。また、コタンチシ(同行したアイヌ)は、キツネ1頭を射<sup>う</sup>ちとり、林の中の木陰で、半樽<sup>たる</sup>を開けての酒宴を開き、夜8時頃に、それぞれ寝た。

11日出発。これより川を下り、朝9時半過ぎにレフンシリへ着く。しばらく休んで出発するが、今日は西風があつて、湖中(網走湖)は、波が荒く、水夫(同行したアイヌ)も困<sup>こま</sup>っていたが、そのまま進む。…

(美幌町郷土史研究会 土谷勇次郎氏訳)



美幌町鳥里地区に、網走川(写真左)と美幌川(写真右)が合流する場所がありますが、このあたりがヘテウコビ(川の合流点)だったと考えられます。松浦武四郎たちは、ここでマスやイトウ<sup>つか</sup>を捕まえて食べていますが、今でも魚影<sup>ぎよえい</sup>が濃く見られ、釣り人の姿も多い場所です。